

1サムエル記28-31章 「サウルの死」

アウトライン

1A サウルの魔術 28

- 1B 答えられない主 3-11
- 2B 死の宣言 12-19
- 3B 霊媒による給仕 20-25

2A 戦いを阻まれるダビデ 29

- 1B ペリシテ領主の不安 1-5
- 2B 敵になれないダビデ 6-11

3A ダビデの立ち上がり 30

- 1B 妻子の喪失 1-6
- 2B 逆境に耐える恵み 7-15
- 3B 喪失の奪還 16-20
- 4B 勝利の分与 21-31

4A ペリシテ軍の浸透 31

- 1B サウルと息子の死 1-7
- 2B ヤベシュ人の勇気ある葬儀 8-13

本文

サムエル記第一 28 章を開いてください。

1A サウルの魔術 28

私たちは前回 28 章 2 節まで読みました。ダビデがペリシテ人の王アキシユの下で仕えていたところを読みました。そして、ペリシテ人がイスラエルと戦うことになった時になんとダビデはアキシユといっしょに出かけたのです。イスラエルを救うはずの王が、イスラエルと敵対するという恐ろしいことをダビデは行なおうとしていました。そしてその先にはもちろん、サウルがいます。これまでサウルに手を下さなかったダビデが、このままではサウルと戦うことになるのです。

1B 答えられない主 3-11

このダビデの話と並行して、今度はイスラエル側で起こっている出来事が三節から始まります。サウルがペリシテ人の来ている時に取った行動について書いてあります。

28:3 サムエルが死んだとき、全イスラエルは彼のためにいたみ悲しみ、彼をその町ラマに葬った。サウルは国内から霊媒や口寄せを追い出していた。

既にサムエルが死んだことは、ダビデがナバルの所に人を送ったところでも言及されていました。霊的指導者がいなくなった後に、その覆いがなくなることによって何かしらダビデにも影響があったかと思います。同じようにサウルにも大きな影響がありました。それがこれからの話になります。サウルは、サムエルの影響を受けていたので、その治世の初期には国内から霊媒や口寄せを追い出していました。モーセの律法には、「男か女で、霊媒や口寄せがいるなら、その者は必ず殺されなければならない。彼らは石で打ち殺されなければならない。彼らの血の責任は彼らにある。(レビ記 20:27)」とあります。神の御霊ではない他の方法で、霊界との接触をすることを神は厳しく禁じられています。

28:4 ペリシテ人が集まって、シュネムに来て陣を敷いたので、サウルは全イスラエルを召集して、ギルボアに陣を敷いた。28:5 サウルはペリシテ人の陣営を見て恐れ、その心はひどくわなないた。

「シュネム」は、イズレエル平原の東にある町です。イスラエル領の深い部分にまで浸透しています。そしてギルボアはイズレエル平原の南東に位置する山脈です。そして、サウルがその陣営を見て、「その心はひどくわなない」ています。サウルからは神の御霊が離れています。そして今、最後に自分の拠り頼んでいた霊的指導者サムエルがいなくなって、それで彼はその勇気を失っていたのです。

28:6 それで、サウルは主に伺ったが、主が夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても答えてくださらなかったのもので、

これがサウルの生涯でした。主に伺って、主がそのまま答えてくださった箇所を見つけることができません。これは恐ろしいことですね。けれども、なぜ主が語ってくださらないのでしょうか？主が行ないなさいという命令を行なっていなかったからです。明らかに主が命じておられることを行なっていないのに、主に伺いを求めても語ることはありません。

ある方が、神の御心について自動車と交通法の喩えを使っていました。どの自動車を買うべきかと考えている人が、交通法を学ばずにそんなことを考えているなら極めて危険です。その交通法が聖書だということです。主が命じられていることを知らなければ、個々の御心について主が示されるはずがありません。聖書から神の命令を知ってそれに従っているからこそ、次に主は個々の御心を示されるのです。だから、こうした学びが必ず必要になるのです。

28:7 サウルは自分の家来たちに言った。「霊媒をする女を捜して来い。私とその女のところに行って、その女に尋ねてみよう。」家来たちはサウルに言った。「エン・ドルに霊媒をする女がいます。」

なんとサウルは、自分がかつて追い出した霊媒に頼ります。主の命令に聞くことができないけれども、それでも将来なことが不安なので霊媒に頼っているのです。私は、本屋の女性雑誌のコーナーに、占いの本が並んでいるところに聖書を置きたい気分になりますが、聖書こそが占いよりも比較にならないほど確かな道筋を教えてください。

そして、主の命令に聞き従わないサウルに対して、かつてサムエルが言った言葉を思い出しましょう。「まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。(1サムエル記 15:23)」サウルがアマレク人を聖絶しなかったその罪、主の御声に聞き従わなかった罪は、占いの罪と同じであるとサムエルは言いました。それは形容ではなく、文字通りそうってしまったのです。

そして「エン・ドル」は、イズレエル平原にあるタボル山のところにある場所です。

28:8 サウルは、変装して身なりを変え、ふたりの部下を連れて、夜、その女のところに行き、そして言った。「霊媒によって、私のために占い、私の名ざす人を呼び出してもらいたい。」28:9 すると、この女は彼に言った。「あなたは、サウルがこの国から霊媒や口寄せを断ち滅ぼされたことをご存じのほうです。それなのに、なぜ、私のいのちにわなをかけて、私を殺そうとするのですか。」28:10 サウルは主にかけて彼女に誓って言った。「主は生きておられる。このことにより、あなたが咎を負うことは決してない。」28:11 すると、女は言った。「だれを呼び出しましょうか。」サウルは言った。「サムエルを呼び出してもらいたい。」

サウルは、ヤハウエの名を使って霊媒に伺いを立てています。私たちが、主の御心に反しながら、なお主の名によって語ることを証明しています。これこそ、「主の名をみだりにとなえてはならない。」ということです。

2B 死の宣言 12-19

28:12 この女がサムエルを見たとき、大声で叫んだ。そしてこの女はサウルに次のように言った。「あなたはなぜ、私を欺いたのですか。あなたはサウルではありませんか。」28:13 王は彼女に言った。「恐れることはない。何が見えるのか。」この女はサウルに言った。「こうごうしい方が地から上って来られるのが見えます。」28:14 サウルは彼女に尋ねた。「どんな様子をしておられるか。」彼女は言った。「年老いた方が上って来られます。外套を着ておられます。」サウルは、その人がサムエルであることがわかって、地にひれ伏して、おじぎをした。

サムエルが出てきました。このことについて、いくつかの意見があります。本当に実際のサムエルが出てきたのかどうか？ということです。私は、これからのサムエルの言葉から実際のサムエルであると思います。では、霊媒によってこのように本当に死者から伺いを立てることができるのかどうか？ということです。それについては、私は悪霊の欺きであると思います。それは、申命記 13章に書いてある通りです。「あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現われ、あなたに何か

のしるしや不思議を示し、あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。」と言っても、その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない。あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。(1-3節)」

けれども、ここでは主がサウルに裁きを宣告されるために、霊媒という手段を通してでもサムエルを引き出された、と考えられます。その証拠に、女が大声で叫んでします。彼女が制御できない方法でサムエルが現れてきたことは確かです。

あと、サムエルが「地から上って来る」とあることに注目してください。旧約の時代は、全ての人が陰府に下りました。新約聖書ではハデスと呼ばれるところです。ラザロと金持ちの話で、そこには「アブラハムのふところ」と呼ばれる慰めの区域と、火があり、けれども燃え尽きない、苦しみのところがあります。その間には大きな淵があり、互いに行き来できないのですが、互いに語ることはできます。アブラハムと同じように神を信じて死んでいった人はアブラハムのふところへ、そして不従順であった人たちは金持ちのいる苦しみの場所にいます。ですからサムエルが、そこにいたことは確かです。

そして、サムエルが年老いている、外套を着ているというように、何らかの体を持っていることも興味深いです。まだ体の復活はしていないのですが、復活する前の霊も何らかの形で体が与えられているのかもしれませんが。

28:15 サムエルはサウルに言った。「なぜ、私を呼び出して、私を煩わすのか。」サウルは言った。「私は困りきっています。ペリシテ人が私を攻めて来るのに、神は私から去っておられます。預言者によっても、夢によっても、もう私に答えてくださらないのです。それで私がどうすればよいか教えていただくために、あなたをお呼びしました。」

サムエルの「なぜ、煩わすのか」という言葉が興味深いです。死んでからは、安息に入っていることがよく分かります。そこから呼び出されたので煩いだ、と言っているのです。

28:16 サムエルは言った。「なぜ、私に尋ねるのか。主はあなたから去り、あなたの敵になられたのに。28:17 主は、私を通して告げられたとおりのことをなされたのだ。主は、あなたの手から王位をはぎ取って、あなたの友ダビデに与えられた。28:18 あなたは主の御声に聞き従わず、燃える御怒りをもってアマレクを罰しなかったからだ。それゆえ、主はきょう、このことをあなたにされたのだ。」

これは、ずっと前に主がサムエルを通して語られた定めです。分かりますか、主の御心が変更されることはないのです。主がこうであると言われたことが、後になって変更された、あるいは無効

になったかのように、生きている人たちがたくさんいます。そして、新たに神を求めている人たちがたくさんいます。

「主が、あなたの敵になられた」というのは強い言葉ですが、これはキリストの内にある者には反対のことが約束されています。「神が私たちの味方」なのです(ローマ 8 章)。したがって、キリストに自分を服していない人は、何をやっても神が敵対しておられるということです。

28:19 主は、あなたといっしょにイスラエルをペリシテ人の手に渡される。あす、あなたも、あなたの息子たちも私といっしょになろう。そして主は、イスラエルの陣営をペリシテ人の手に渡される。」

主は、はっきりとサウルの死を「あす」と定めておられました。そして、サウルのみならず息子たちも死んでしまいます。サムエルは「私といっしょになろう」と言っていますが、必ずしも同じ慰めのところに行くというのではなく、陰府のどちらかに行くということです。

3B 霊媒による給仕 20-25

28:20 すると、サウルは突然、倒れて地上に棒のようになった。サムエルのことばを非常に恐れたからである。それに、その日、一昼夜、何の食事もしていなかったのも、彼の力がうせていたからである。

悔い改めない心は、正しい神の前で、このように恐れて怯えることしかできません。けれども、へりくだる魂は、懲らしめを受け、碎かれることがあっても、そしてその意味で心が怯えることがあるかもしれませんが、いわゆる恐怖の中に陥ることはありません。

28:21 女はサウルのところに来て、サウルが非常におびえているのを見て彼に言った。「あなたのはしためは、あなたの言われたことに聞き従いました。私は自分のいのちをかけて、あなたが言われた命令に従いました。28:22 今度はどうか、あなたがこのはしための言うことを聞き入れてください。パンを少し差し上げますから、それを食べてください。お帰りのとき、元気になられるでしょう。」28:23 サウルは、これを断わって、「食べたくない。」と言った。しかし、彼の家来とこの女がしきりに勧めたので、サウルはその言うことを聞き入れて地面から立ち上がり、床の上にすわった。28:24 この女の家で肥えた子牛がいたので、急いでそれをほふり、また、小麦粉を取って練り、種を入れないパンを焼いた。28:25 それをサウルとその家来たちの前に差し出すと、彼らはそれを食べた。その夜、彼らは立ち去った。

興味深いですね、イスラエルの王が霊媒の女から慰めを受けています。どちらも主に反逆する者たちであり、主の裁きを受ける身であります。サウルにとっては、これが死刑直前の食事と同じように、最後の食事となったことでしょう。

2A 戦いを阻まれるダビデ 29

1B ペリシテ領主の不安 1-5

29:1 さて、ペリシテ人は全軍をアフエクに集結し、イスラエル人はイズレエルにある泉のほとりに陣を敷いた。

先ほど、ペリシテ人がシュネムに来ていたところを読みましたが、話は少し戻ります。アフエクは、ずっとペリシテ人の地に近いところにあります。

29:2 ペリシテ人の領主たちは、百人隊、あるいは千人隊を率いて進み、ダビデとその部下は、アキシユといっしょに、そのあとに続いた。29:3 すると、ペリシテ人の首長たちは言った。「このヘブル人は何者ですか。」アキシユはペリシテ人の首長たちに言った。「確かにこれは、イスラエルの王サウルの家来ダビデであるが、この一、二年、私のところにいて、彼が私のところに落ちのびて来て以来、今日まで、私は彼に何のあやまちも見つけなかった。」29:4 しかし、ペリシテ人の首長たちはアキシユに対して腹を立てた。ペリシテ人の首長たちは彼に言った。「この男を帰らせてください。あなたが指定した場所に帰し、私たちといっしょに戦いに行かせないでください。戦いの最中に、私たちを裏切るといけませんから。この男は、どんなことをして、主君の好意を得ようとするでしょうか。ここにいる人々の首を使わないででしょうか。29:5 この男は、みなが踊りながら、『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。』と言って歌っていたダビデではありませんか。」

まったくペリシテ人の領主たちの言う通りです。ダビデはアキシユを騙すことができましたが、他の領主たちは、まさにペリシテ人を打った勇士であり、彼がペリシテのために戦えるはずがないと言いました。

2B 敵になれないダビデ 6-11

29:6 そこでアキシユはダビデを呼んで言った。「主は生きておられる。あなたは正しい人だ。私は、あなたに陣営で、私と行動を共にしてもらいたかった。あなたが私のところに来てから今日まで、私はあなたに何の悪いところも見つけなかったのだから。しかし、あの領主たちは、あなたを良いと思っていない。29:7 だから今のところ、穏やかに帰ってくれ。ペリシテ人の領主たちの、気に入らないことはしないでくれ。」

ダビデを信頼していたアキシユであっても、他の領主たちとの仲を大切にしました。これが世であります。神の側についているのか世についているのか、二つのうちのどちらかなのです。

29:8 ダビデはアキシユに言った。「私が何をしたというのでしょうか。私があなたに仕えた日から今日まで、このしもべに何か、あやまちでもあったのでしょうか。王さまの敵と戦うために私が出陣できないとは。」29:9 アキシユはダビデに答えて言った。「私は、あなたが神の使いのように正しいということを知っている。だが、ペリシテ人の首長たちが、『彼はわれわれといっしょに戦いに行

ってはない。』と言ったのだ。29:10 さあ、あなたは、いっしょに来たあなたの主君のしもべたちと、あしたの朝、早く起きなさい。朝早く起きて、明るくなったら出かけなさい。」29:11 そこで、ダビデとその部下は、翌朝早く、ペリシテ人の地へ帰って行った。ペリシテ人はイズレエルへ上って行った。

ダビデが強い意志で行こうとするのを阻んだアキシユの背後には、もちろん神の御手が働いています。もしこのことがなければ、イスラエルと戦わなければいけなかったどころか、次の事件を早期に発見できなかったこととなります。

3A ダビデの立ち上がり 30

1B 妻子の喪失 1-6

30:1 ダビデとその部下が、三日目にツイケラグに帰ってみると、アマレク人がネゲブとツイケラグを襲ったあとだった。彼らはツイケラグを攻撃して、これを火で焼き払い、30:2 そこにいた女たちを、子どももおとなもみな、とりこにし、ひとりも殺さず、自分たちの所に連れて去った。30:3 ダビデとその部下が、この町に着いたとき、町は火で焼かれており、彼らの妻も、息子も、娘たちも連れ去られていた。30:4 ダビデも、彼といっしょにいた者たちも、声をあげて泣き、ついには泣く力もなくなった。30:5 ダビデのふたりの妻、イズレエル人アヒノアムも、ナバルの妻であったカルメル人アビガイルも連れ去られていた。30:6 ダビデは非常に悩んだ。民がみな、自分たちの息子、娘たちのことで心を悩まし、ダビデを石で打ち殺そうと言いだしたからである。しかし、ダビデは彼の神、主によって奮い立った。

彼らの住んでいたツイケラグが襲われました。ここで大事なのは子供たち、また妻たちが奪われてしまったことです。ダビデに対する神の目覚ましであります。サウルから自分たちを守るために行なったことが、結局、最も大切なものの一つを奪い取られる結果となったのです。「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。(マルコ 8:35)」

このような痛みを主はダビデに許されました。ダビデは痛い方法で、再び主に立ち上がることができました。私たちは、神の知恵を得るために、御霊の促しによって自然な形で与えられる方法と、このように強いられるようにして得る方法との二つがあります。詩篇 32 篇は、この二つの導きが書かれています。「わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。あなたがたは、悟りのない馬や騾馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押えなければ、あなたに近づかない。(8-9 節)」主が助言を与えておられる時に、素直に従順になっていけば、それが恵みとして豊かに与えられます。けれども、いつまでもその言葉に従っていなければ、悟りのない馬や騾馬のようになってしまいます。つまり、強いられるようにして、くつわや手綱の馬具で押さえなければいけなくなるのです。私たちは、どちらの方法で知恵を得ているのでしょうか？

2B 逆境に耐える恵み 7-15

30:7 ダビデが、アヒメレクの子、祭司エブヤタルに、「エポデを持って来なさい。」と言ったので、エブヤタルはエポデをダビデのところに持って来た。30:8 ダビデは主に伺って言った。「あの略奪隊を追うべきでしょうか。追いつけるでしょうか。」するとお答えになった。「追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。」

主によって奮い立ったダビデは、力を得ることができました。氣力を得ることができました。自分しか見ていなかった彼であれば、絶望のなかで打ちひしがれていたことでしょう。到底、アマレク人に追いつくことができるなど考えられなかったはずです。けれども、ダビデは主のお心であれば追いつけると思ったのです。けれども、彼は自分で思い込むことはしませんでした。そこで主に伺ったのです。

30:9 そこでダビデは六百人の部下とともに出て行き、ベソル川まで来た。残された者は、そこにとどまった。30:10 ダビデと四百人の者は追撃を続け、疲れきってベソル川を渡ることでできなかった二百人の者は、そこにとどまった。

ダビデはここで落胆してもおかしくない状況でした。人数が三分の二に減ってしまったのです。けれども、主がなさるのであれば人数が少ないのは問題にならないという信仰が与えられていました。この恵みによって追撃したのです。

30:11 彼らはひとりのエジプト人を野原で見つけ、ダビデのところに連れて来た。彼らは彼にパンをやって、食べさせ、水も飲ませた。30:12 さらに、ひとかたまりの干しいちじくと、二ふさの干しぶどうをやると、彼はそれを食べて元気を回復した。三日三晩、パンも食べず、水も飲んでいなかったからである。

追撃を続けている時に、まさかこのように倒れている者を助けるでしょうか？けれども、ダビデには弱っている人に神の御業を見る力が与えられていました。ちょうど生まれつき盲目の人をご覧になったイエス様のように、ダビデも弱っている人に信仰をもって目を留めたのです。このような憐れみの心がダビデに与えられています。

30:13 ダビデは彼に言った。「おまえはだれのものか。どこから来たのか。」すると答えた。「私はエジプトの若者で、アマレク人の奴隷です。私が三日前に病気になったので、主人は私を置き去りにしたのです。30:14 私たちは、ケレテ人のネゲブと、ユダに属する地と、カレブのネゲブを襲い、ツイケラグを火で焼き払いました。」30:15 ダビデは彼に言った。「その略奪隊のところに案内できるか。」彼は答えた。「私を殺さず、主人の手に私を渡さないと、神かけて私に誓ってください。そうすれば、あなたをあの略奪隊のところに案内いたしましょう。」

主の導きでした。半死状態のエジプト人は、アマレク人の奴隷だったのです。

3B 喪失の奪還 16-20

30:16 彼がダビデを案内して行くと、ちょうど、彼らはその地いっぱい散って飲み食いし、お祭り騒ぎをしていた。彼らがペリシテ人の地やユダの地から、非常に多くの分捕り物を奪ったからである。30:17 そこでダビデは、その夕暮れから次の夕方まで彼らを打った。らくだに乗って逃げた四百人の若い者たちのほかは、ひとりもののがれおおせなかった。30:18 こうしてダビデは、アマレクが奪い取ったものを全部、取り戻した。彼のふたりの妻も取り戻した。30:19 彼らは、子どももおとなも、また息子、娘たちも、分捕り物も、彼らが奪われたものは、何一つ失わなかった。ダビデは、これらすべてを取り戻した。

驚くべきことです！誰一人失われた者がおらず、全てを取り戻しました。これを主の恵みと言います。私たちがたとえ失敗をしても、それを補うに余りある回復を主は与えることができになります。

30:20 ダビデはまた、すべての羊と牛を取った。彼らはこの家畜の先に立って導き、「これはダビデの分捕り物です。」と言った。

つまり、ダビデは自分たちの奪い取られた所有物以上に、分捕り物も与えられ、それで凱旋したのです。これがまさに、勝利の主であられるイエス・キリストを表しています。「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。(コロサイ 2:15)」主は、私たちが自分の罪によって失った物を補われるのみならず、それ以上に祝福してくださいます。信仰の勝利者には、ありあまるキリストの分捕り物を提供してくださいます。

4B 勝利の分与 21-31

30:21 ダビデが、疲れてダビデについて来ることができずにベソル川のほとりにとどまっていた二百人の者のところに来たとき、彼らはダビデと彼に従った者たちを迎えに出て来た。ダビデはこの人たちに近づいて彼らの安否を尋ねた。30:22 そのとき、ダビデといっしょに行った者たちのうち、意地の悪い、よこしまな者たちがみな、口々に言った。「彼らはいっしょに行かなかったのだから、われわれが取り戻した分捕り物を、彼らに分けてやるわけにはいかない。ただ、めいめい自分の妻と子供を連れて行くがよい。」30:23 ダビデは言った。「兄弟たちよ。主が私たちに賜った物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちを襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。30:24 だれが、このことについて、あなたがたの言うことを聞かろうか。戦いに下って行った者への分け前も、荷物のそばにとどまっていた者への分け前も同じだ。共に同じく分け合わなければならない。」30:25 その日以来、ダビデはこれをイスラエルのおきてとし、定めとした。今日もそうである。

ダビデはさらに、神の恵みから恵みに満ちあふれる行為を取っています。戦った者が分捕り物を受け取るというのが、人間的には当然の報酬であります。そして働かない者には、与えられないのは当然であります。けれどもダビデは何と言いましたか？23 節です、「**主が私たちに賜った物**」であります。自分が長いこと主に背いてきたのに、こんなにすばやく恵みをもって回復してくださった。本来、このようなものを受けるに値しないのに受けている。だからこれは、同じように受けるに値しない人にも分け与えるのだ、ということです。神の恵みが、等しく人々にあるのです。

ここで思い出すのが、「五時からの男」です。主人が労務者たちを雇うのに、一デナリの約束をしました。ある者たちは午前九時から働いていましたが、別の者たちは十二時頃、そして三時頃、さらに五時から働く者がいました。終業時間が六時です。ところが主人は五時から働き始めた労務者から一デナリを与え、最初にいた者たちにも一デナリを与えました。これに対して初めから働いた者たちが文句を言ったところ、主人が、「あなたがたとの約束は一デナリだった。そして、自分のものを自分の思うようにしてはいけないのか。それとも、わたしの気前良さがねたましかったのか？」と聞きました。

30:26 ダビデはツィケラグに帰って、友人であるユダの長老たちに分捕り物のいくらかを送って言った。「これはあなたがたへの贈り物で、主の敵からの分捕り物の一部です。」30:27 その送り先は、ベテルの人々、ネゲブのラモテの人々、ヤティルの人々、30:28 アロエルの人々、シフモテの人々、エシュテモアの人々、30:29 ラカルの人々、エラフメエル人の町々の人たち、ケ二人の町々の人たち、30:30 ホルマの人々、ボル・アシャンの人々、アタクの人々、30:31 ヘブロンの人々、および、ダビデとその部下がさまよい歩いたすべての場所の人々であった。

ダビデは、荷物置きをした人々どころか、ユダの町々の人々に対してもその恵みを分かち合いました。神の民となっている者はキリストの恵みが無報酬で与えられるという原則をここで見ることができます。

4A ペリシテ軍の浸透 31

1B サウルと息子の死 1-7

31:1 ペリシテ人はイスラエルと戦った。そのとき、イスラエルの人々はペリシテ人の前から逃げ、ギルボア山で刺し殺されて倒れた。31:2 ペリシテ人はサウルとその息子たちに追い迫って、サウルの息子ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シュアを打ち殺した。

以前ヨナタンはダビデに、「あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう。(1サムエル 23:17)」とっていました。けれども残念ながら、ダビデが王となる前にヨナタンは死んでしまいました。

31:3 攻撃はサウルに集中し、射手たちが彼をねらい撃ちにしたので、彼は射手たちのためにひ

どい傷を負った。31:4 サウルは、道具持ちに言った。「おまえの剣を抜いて、それで私を刺し殺してくれ。あの割礼を受けていない子どもがやって来て、私を刺し殺し、私をなぶり者にするといけなから。」しかし、道具持ちは、非常に恐れて、とてもその気になれなかった。そこで、サウルは剣を取り、その上にうつぶせに倒れた。31:5 道具持ちも、サウルの死んだのを見届けると、自分の剣の上にうつぶせに倒れて、サウルのそばで死んだ。31:6 こうしてその日、サウルと彼の三人の息子、道具持ち、それにサウルの部下たちはみな、共に死んだ。

サウルは、最後まで面子を大事にする人でした。ペリシテ人になぶりものにされるぐらいなら、自害したいということです。

31:7 谷の向こう側とヨルダン川の向こう側にいたイスラエルの人々は、イスラエルの兵士たちが逃げ、サウルとその息子たちが死んだのを見て、町々を捨てて逃げ去った。それでペリシテ人がやって来て、そこに住んだ。

かつて、サウルがペリシテ人と戦った時のように、イスラエルの民は恐れまどって逃げていました。そしてヨルダン川を越えてまでペリシテ人が住んでしまいました。

2B ヤベシュ人の勇気ある葬儀 8-13

しかし、勇気ある人々が表れます。

31:8 翌日、ペリシテ人がその殺した者たちからはぎ取ろうとしてやって来たとき、サウルとその三人の息子がギルボア山で倒れているのを見つけた。31:9 彼らはサウルの首を切り、その武具をはぎ取った。そして、ペリシテ人の地にあまねく人を送って、彼らの偶像の宮と民とに告げ知らせた。31:10 彼らはサウルの武具をアシュタロテの宮に奉納し、彼の死体をベテ・シャンの城壁にさらした。

ベテ・シャンは、ヨルダン川の西側、イズレエル平原の入口の町ですが、そこには今、ローマの町の遺跡があります。けれども、奥に大きな丘がありそれ全体が遺跡です。カナン時代からの町が埋まっています。そこでペリシテ人はサウルを屈辱にさらしました。首を切り、偶像にサウルの武具を奉納し、死体をベテ・シャンの城壁にさらしました。

31:11 ヤベシュ・ギルアデの住民が、ペリシテ人のサウルに対するしうちを聞いたとき、31:12 勇士たちはみな、立ち上がり、夜通し歩いて行って、サウルの死体と、その息子たちの死体とをベテ・シャンの城壁から取りはずし、これをヤベシュに運んで、そこで焼いた。31:13 それから、その骨を取って、ヤベシュにある柳の木の下に葬り、七日間、断食した。

ヤベシュ・ギルアデの人たちが、なぜサウルの死体をこのように命をかけて葬ったのでしょうか

か？士師記に戻ります。ベニヤミン族が他のイスラエル部族と戦争をして、六百人しかいなくなりました。彼らに妻を与えるために、イスラエル人は戦争に参加しなかった者たちを調べたら、ヤベシュ・ギルアデからは出ていないことを知りました。そこで彼らは未婚の女を除くすべての者を殺したのです。それで女たち四百人をベニヤミンに与えたのです。ゆえにベニヤミン族にはヤベシュ・ギルアデの人々の血が入っており、それでサウルを丁重に葬るために動いたのです。

こうしてサウルが死にました。ダビデの言葉を思い出してください。ダビデとアビシャイが、サウルの陣営に行き、そこからサウルの槍と水差しを取るときに、アビシャイに彼がこう言いました。「**ダビデは言った。「主は生きておられる。主は、必ず彼を打たれる。彼はその生涯の終わりに死ぬか、戦いに下ったときに滅ぼされるかだ。(1サムエル 26:10)**」今、戦いの中でサウルが滅びました。主は彼を打たれたのです。危うくダビデは、自分の手でサウルを殺してしまったかもしれませんが、けれども主が、ペリシテ人の領主の言葉を用いてその惨事を免れさせてくださったのです。

ダビデがいかに完璧な人間ではないことに気づきますね。主の憐れみがなければ、彼はイスラエルの王となることはできませんでした。けれども、彼には主へのへりくだりがありました。すべてのことが主から来ていること、そのアマレク人の襲撃が主からの警告であることをすぐに悟りました。さらに主への信頼を回復させて、すばやく動いたのです。そして主の恵みを等しく分かち合う心を持っていました。

私たちが表向き良い人間になろうとしてはいけません。いつかボロが出ます。そうではなく、罪も不足もすべて主に対して明かされている人になってください。そして砕かれてください。そのへりくだった魂を神は尊く用いられます。